

トルコをめぐる調査の現状と課題

寺 阪 昭 信*

Recent Field Research on Turkey by Japanese Geographers

Akinobu TERASAKA*

目 次

- | | |
|-------------------|------------------------|
| I トルコの調査環境 | IV 地理学における海外調査はどうあるべきか |
| II 日本におけるトルコ研究の歴史 | V おわりに |
| III 入国許可の問題 | |

I. トルコの調査環境

まずはじめにトルコにおける研究調査をめぐる一般的な環境についてふれておきたい。トルコは中東のイスラム圏の国でありながら、アタチュルクによる1923年の共和国建国以降、世俗主義と政教分離政策がとられたこと、対外政策は伝統的に西欧に強く指向(NATOに加わり、1963年からはECの準加盟国) してきて、経済の自由化も進んできたので、基本的には開放的である。それゆえ、他のイスラム諸国に較べると調査上の制約は少ないといえる。しかしながら、西ヨーロッパ諸国と同質の自由が与えられているわけではない。70年代後半の社会的混乱を80年に軍事クーデターで押さえていた時代と比較して、83年の民政復帰以降の開放型経済開発の時代になると、一層西ヨーロッパへの指向が強まり、欧州関税同盟に加盟するまでにいたった。近年ではその反動からイスラムへの回帰の運動が強まり、96年に福祉党が政権の座について動きが加速されている。こうした政治・社会の展開の下で調査事情は刻々変わっている。その間の事情については日本学術振興会が西アジア地域派遣研究員をアンカラに置いていた80年代前半(最初テヘランに置かれていたが、革命により継続できなくなりアンカラに移され、1981年から10年ほど続いた後に廃止された。研究者には歴史学者が多い) について堀川(1985)、また近年の調査をめぐる情報については林(1997) に詳しい。

*流通経済大学; Ryutsu Keizai University

全体的なトルコの調査環境を要約すると3点になる。

① 親日国である。トルコは18世紀以来ヨーロッパ列強の圧力下にあって衰退しつつあったオスマン帝国末期以来、日本の明治維新を高く評価してきた。近代化への途上において日本との国交樹立を意図して派遣された使節団に発生したエルトゥール号事件（1888年）の悲劇とそれに際して取られた日本の対応については今でもトルコの人により多く伝わっている（日本では和歌山県の一部にしか伝わっていないであろう）。さらに日露戦争の勝利に対する称賛がかさなっていた。

第二次世界大戦では中立を守るが（最後に連合国側につくのだが）、朝鮮戦争には国連軍として参加して、多くの軍人が日本を経由していたようである。それがまた日本に対してよい印象を与えたように思われる。さすがに現在では少なくなったが、80年代前半には朝鮮戦争に参加したと我々をみるとなつかしそうに話し掛けてくる年配の人によく出会った。そのうちのかなりの割合の人が手や足を失っていたのが印象に深く残っている。日本の病院で親切に手当を受けたことをなつかしがっていた。敗戦の復興も終わっていない50年代始めの日本でも、彼らが戦場から負傷して運ばれれば平和な美しい国に見えたのであろう。そのような日本を賛美する経験者が万を越える数であり、トルコ全土に存在していたし、している（1個旅団、延べ29,882名、死者717名、負傷者2,246名、その後の派遣者を含めると5万人に達するという——松谷1987）。したがって対日感情は極めてよく、日本人であることによる差別、不利益は全くない大変に居心地のよい国である。相対的に治安は良くスリなどに出会う危険は少なく、衛生状態も良好であり、食事（アルコール類も飲める）、生活についても違和感が少なく滞在しやすい。そのような意味でいえば中東地域のなかでは調査環境として恵まれているといえる。研究者のレベルでいうと、革命後イランでの調査が困難になって、研究対象をトルコに転換した人は多いが、その逆にトルコから逃げ出した人はいない。

② 警察国家、官僚主義の色彩が強い国である。庶民や個人のレベルとは異なって組織としての対応となると官僚制度の強さを感じさせる。許可を得るにはトップダウンの必要がある。80年代前半の調査では、まず県知事に面会しないと調査が始められなかった。政府機関であれば、中央の許可がなければ出先機関は何も動かないという、しっかりした官僚組織ができています。また調査の行動予定は末端の警察署にきちんとファイルされている。それだけに様々な記録があり、統計もしっかりしている国である。

1983年以降状況は変わってきたとはいえ、軍の力は依然として強固である。調査許可の範囲外に出るときは注意が必要である。文書館、資料館でも最初に掲げた目的外の資料は見られないというアプローチの制約がある。調査の対象を研究の進展に応じて広げたり変

えていくという自由，ないしは融通性をもって，こちら側の都合で勝手に広げることは困難である。とくに工場や農村部に入るには予めしかるべき人脈が必要である。もっともそのような関係を創り出すことはさほど難しいことではないが。

③ 地図のない国。一般に地図はトルコ人社会において普及していないし，入手も困難である。町中で地図を見かけることはないし，トルコの新聞，雑誌類でも地図が使われていることは極端に少ない。測量図の制作は陸軍の管轄下にあつて，入手も，国外持ち出しも不可能である。観光地図はしっかりしたものがイスタンブル，アンカラ，イズミル，それに最近アンタリヤが加わり大都市を中心に整っている。地方都市では略図的なものはかなり見かけるようになってきた。外国製の観光地図に関していえば出版されているのはイスタンブルに限られている。

また幾つかのヨーロッパで刊行されているガイドブックの中には優れた地図が載っているものもある。しかしながら地理学的調査に使うとなるといかにも物足りない。航空写真，衛星写真を利用することはこれからの課題といえる。したがってインテンシブな調査をする際にベースマップに苦勞することとなる。ただし，都市レベルになるとそれなりに大縮尺の地図を入手することは可能となってくる。

しかしながら②に述べた状況から，地図を持ち合わせたとしても町中で大縮尺の地図を広げて調査をするというわけにはいかない。なお写真，ビデオの撮影も大都市や観光地以外の場所では注意が必要であろう。

言葉の問題にも少しふれておく必要がある。一般的には日本人にとってトルコ語は学びやすい外国語になるであろう。十分に言葉ができなくてもそれなりに，意志を通じることは可能である。不十分な言語能力でも受け入れてくれる寛容さがあり，ドイツ語やフランス語などの世界と異なる良さがある。その分トルコへ溶け込みやすいと言えるかも知れない。またトルコ人一般への英語の普及とその会話能力は日本人と較べるとはるかに高いし，ドイツ帰りの人も多いことから，ドイツ語も通じることが多い。もちろんトルコ語しか通じない世界が多いのは当然である。ただし大多数の研究者，企業の幹部，上級職公務員はすばらしい外国語の能力をもっているのだからこちらのトルコ語の能力が不十分でも調査は可能である。ただし，オスマン時代の古い文献をこなすとなると話は別で相当の時間をかけた訓練を積まなくてはならない。地理学者にはきつい条件である。

以上のように，トルコは西欧先進諸国に近い面もあるが，同じレベルでの調査は期待できない。そこでどのようなスタイルの調査をするかの工夫が求められることになる。

II. 日本におけるトルコ研究の歴史

1. トルコへの学問的な関心

トルコへの研究者の渡航としては、第2次大戦前では早くは建築の伊東忠太(1905年)の調査が例外的に存在する他、旅行者として東洋史の宮崎市定(1937年)のような短期の訪問(「西アジア遊記」1986中公文庫)、それに回教圏研究所の大久保幸次がいた(永田雄三氏の教示による)。戦後になって1958年に歴史学者護雅夫が最初に長期滞在し、日本とトルコとの間の学術交流の基礎を築いた。

歴史学の分野についていえば、1965年の永田雄三に始まりイスタンブールやアンカラを中心に研究者が次々に留学するようになる。地理学では1967年の鴨沢巖が最初の長期滞在研究者であるが、その後は続かず留学者も出ていない。

他方、アジア経済研究所が継続的にこの地域をカバーして人を派遣してほぼ毎年政治経済動向を調査して報告書を出しており、またそこから多くの研究者を生み出している。考古学では80年代からアナトリア中央高原のカマン発掘調査が中近東文化センターの手で続けられているが、パキスタン、エジプトに較べると経験は浅いといえよう。

文部省の科学研究費関係を中心にトルコ調査の動向を整理してみると表1のようになる(資料の関係で1975年以降に限る、80年以前は情報不足、75~97年に88隊)。80年代前半までは細々と行われていた調査が1986年以降は毎年複数の調査隊が訪問、90年代になると増加傾向が見られ、とくに95年には12隊も入っている。

そこから読み取れることはトルコのみを単独に調べるのではなくより広域の対象国との比較研究のなかでトルコを調査地域に加える研究が増加傾向にあり、研究領域も広がっているといえよう。トルコに限定した地域研究の対象とするよりも、より専門化された研究の枠組みの一部としてこの地域が選ばれているものと考えられる。

学問分野で言えばフィールドワークを主体としているが、自然科学系は約30%を占めている。文化人類学からは申請していない(研究対象とはなり難いのか)。これは別ルートで行っているものと見られる。とくに90年代になると建築、美学から自然科学(地震・活断層、植物・薬草、環境問題)にいたるさまざまな分野での調査研究が進行する。また地震関係では初期から調査が行われているが、科学研究費以外に通産省の地質調査所が90年から活断層の発掘を行っており、さらに92年のエルジンジャン地震については文部省の災害研究班が調査を行っている。

2. 地理学の調査

地理学における筆者が関わった80年代以降の動向を整理すると次のようになる。

末尾至行隊の計画：1979年のアフガニスタン調査は国内の内戦状態のために外務省から出発直前に中止するよう求められた(同年12月にソ連の介入)。81年イラン調査の計画も革命後の混乱により現地調査が不可能になり、第3次計画地として考えていたトルコへ転進し、81, 83年の調査が行われた。

課題：乾燥アジアにおける水利用技術の発生・伝播・定着とその背景に関する地理学的研究。81年 13,152千円, 82年 総括 1,900千円, 83年 12,900千円, 84年 総括 3,500千円 総括年にはトルコから研究者を招聘(合計4名) 参加者：81年 末尾(隊長), 藤本勝次(歴史学), 岡崎正孝(農業経済学), 寺阪, 平岡昭利。83年 末尾(隊長), 原隆一(社会学), 寺阪, 金坂清則, 平岡, 中島茂。合計8名, 内5名が地理学者であった。

これはプロジェクトチームとしての地理学研究として(人文・社会科学系としても)最初のものである。その成果はSueo(1985), 末尾(1989)に発表されている。これは主として現存ならびに廃棄された水車の現地調査, 農村地域における灌漑施設と農業的土地利用調査であった。イスタンブル大学地理学教室の参加を得て, かなり広範囲のエクステンシブな調査とDSI(水資源開発省)の協力でコンヤ, カイセリ県でのインテンシブ調査とが組み合わせられた。

1987年から筆者が隊長として新しい調査申請を行い研究対象を都市へとした。

1987年 オスマントルコ帝国末期以降の都市発展に関する地理学的研究 15,000千円 シリア, トルコ, フランス 参加者：寺阪(隊長), 松田磐余, 金坂, 堀川徹(歴史学), 中林一樹, 内藤正典。

1988年 調査総括 2,000千円 シリアから1人招聘

1989年 旧オスマン帝国領における都市空間とその機能の変容に関する地理学的研究 5,000千円 トルコ, シリア(制度の過渡期で88年から連続して海外調査が出来るようになった。それまでは調査年と整理年とが交互に設けられた) 参加者：寺阪(隊長), 中林, 堀川, 生田真人, (内藤), 黒木英充(歴史学), (小松香織, 歴史学)。

都市発達史の研究を, オスマン末期から共和国への移行に伴うその領域が変化とともに都市システムの変化に取り組んだ。個別の各都市の発展の特徴を歴史地理学的手法で捕えることと, エクステンシブに多くの都市をめぐる資料・地図を収集することに勤めた。素材を絞りきれないままにこの研究は中間報告(英文)のまま中断している。この段階では対象地域としてのフランスは資料収集と研究状況に関する情報を得ることを目的にしていた。

1990年 西ドイツとトルコの都市問題に及ぼすトルコ人移民の社会地理学的研究 3,000千円(補欠) トルコ 参加者 寺阪(隊長), 中林, 堀川, 水内俊雄。

1991・92年 西ヨーロッパ諸国とトルコの都市空間構造に及ぼすトルコ移住民に関する社会地理学的研究 91年 7,000千円, 92年 7,000千円, ドイツ, フランス, トルコ, イギリス 参加者: 91年 寺阪(隊長), 山本健児, 水内, 山口真(女性学), 古石篤子(フランス語学), 足立信彦(ドイツ文学) 92年 寺阪(隊長), 山口, 中林, 堀川, 山本, 水内, 若林芳樹。

1993年 出版助成「イスラム都市の変容」古今書院(1994年刊行) 1,500千円。

国際労働力移動を軸としたトルコとヨーロッパ諸国,(とくにドイツを中心に他の国との比較を取り入れ)との結合関係, 社会関係, 文化変容, とくに受け入れ国における社会との摩擦や課題を社会地理学的な調査する。ドイツへのガストアルバイターとしての人口移動の社会的インパクト, とくに都市部において帰還者がどのような地域と産業に多くかかわるかを考察しようとした。これはトルコの都市のなかではっきりとした構造として捕えることは困難で, ヨーロッパの都市社会におけるトルコ人の問題に傾斜していった。その間にもっとも長く滞在していたアンカラについて材料が集まったので, 一つのモノグラフを書いた。92年から独自のアンケート調査が出来るようになったことも大きい。イスタンブルほど歴史の表舞台に登場するわけではないが, 現在の首都であるアンカラもトルコを代表する都市であることは確かである。

1995年から新しい課題への転換がはかられた。

中林一樹隊 トルコをめぐる国際ツーリズムと都市発展との相互作用に関する社会地理学的研究 95年 9,000千円 96年 7,400千円, ドイツ, フランス, トルコ 参加者: 95年 中林(隊長), 寺阪, 磯部, 山本, 水内, 若林, (長尾謙吉) 96年 中林(隊長), 寺阪, 磯部, 山本, 水内, 若林, 長尾。

上記の研究の延長上に, 国際ツーリズムの発展によりトルコの都市がどのように変わってきたかと言う関心が生じた。歴史的都市の町並み保存と景観保存その延長に最近急速に発展してきた都市としてアンタリヤに目を着けた。労働力移動と裏腹の関係にあるともいえよう。より新たな展開であり, とくにヨーロッパ諸国とトルコ間の緊密な関係が存在することは, まさに現代的な最先端の課題と信じている。まだ解明すべきことは多い。

以上, この10年間に合計5,690万円の補助金を受け, 日本からの参加者は17名(内地理学者11名), 延べ43名に達するというのがこれまでの流れである。

文献

a) 口頭発表

- 1989年4月 日本地理学会春季学術大会：アレppoの都市構造とその変容—(1) 国民統合過程における都市化とエスニシティ 内藤, (2) 市街地の形成過程とその都市計画 中林, (3) アレppoの商業活動について 寺阪, 『日本地理学会予稿集』 35, pp. 90~95
- 1990年4月 日本地理学会春季学術大会：アンカラの都市形成と都市構造—(1) 歴史と人口 寺阪, (2) アンカラの首都建設と都市計画 中林, (3) 商業立地構造の変容 生田, 『日本地理学会予稿集』 37, pp. 176~181
- 1991年6月 人文地理学会第190回例会(特別例会) 茨城大学：トルコの都市の変容 寺阪, 『人文地理』 43-4, pp. 398~400
- 1993年4月 日本地理学会春季学術大会：特別研究発表 トルコの社会地理学的研究 寺阪, 『日本地理学会予稿集』 43, pp. 18~19
- 1996年3月 日本地理学会春季学術大会：トルコをめぐる国際ツーリズムの展開 寺阪・中林, トルコにおける外国人観光客の意識と行動 若林・磯部・山本・長尾, トルコ・アンタリヤの観光開発と都市発展 水内・長尾, 『日本地理学会予稿集』 49, pp. 326~331
- 1997年3月 日本地理学会春季学術大会：トルコへの国際ツーリズムの発展における政府とツアー・オペレータの役割 山本, トルコへの国際ツーリズムの発展とフランス 磯部, トルコ・アンタリヤの都市開発の現状と諸問題 水内・中林, アンタリヤにおける街並み保存とツーリズム 寺阪, 『日本地理学会予稿集』 51, pp. 214~221

b) 著書

- Sueo, Y. ed.: The Utilization of Water and Water Power in Turkey, Kansai University Scientific Mission to Anatolia, Turkey. 1985 228p.
- 末尾至行編『トルコの水と社会』大明堂 1988 203p.
- Geographical Views in the Middle Eastern Cities I Turkey 1989
- Geographical Views in the Middle Eastern Cities II Syria 1990
- Geographical Views in the Middle Eastern Cities III Ankara 1992
- 寺阪昭信編 『イスラム都市の変容』 古今書院 1994 277p.
- 山本健児 『国際労働力移動の空間』 古今書院 1995 428p.

III. 入国許可の問題

トルコは観光目的で3ヵ月以内の滞在についてはビザは不要である。研究調査については調査ビザの申請をする必要がある。これは日本でトルコ大使館を通じて申請をすることになっているから、観光ビザで入国してから調査許可を申請することは出来ない。調査許可申請は1983年以降、民主化されてからはさほど問題はない。80年代最初の頃は半年かかったが、現在では3ヵ月程度で発給されることが多い。83年には調査許可が発給される以前に前回調査の協力者のもとでの活動をして、警察に行動を監視されて緊張関係が生じたこともあった。80年代前半までは警察の滞在許可証を得ることが必要であった。そのうえ警察において滞在証明書を得るのにも時間がかかる。近年、短期間の場合において、受入機

関が全面的に協力してくれる場合には、警察の滞在許可証明なしで調査をしても支障はなかった。ただし、有力な協力者（友人）が得られれば、その保護下（その人の人間関係網のなか）においてビザなしでも調査は可能であろう。その場合には一部の公的機関への接触は難しいかもしれない。とくに文書館、図書館などにおいて。研究調査の連続性は入国許可の容易さ問題のとどまらない。毎年繰り返すことにより信頼関係が強まり、得られる資料の質と量が高くなるのはどの国においても見られる現象であるが、トルコでは強固な官僚組織の上に、それ以上に個人的な人間関係が重視される故、いっそう有利である。そのためには毎年のレポート（少なくとも英文）が重要である。

現地日本大使館との関係については、一般的に文化学術交流に弱く、調査に協力的ではないし、調査許可取得に際して特別なルートを持っているわけではない。しかし万一の場合に事故があった際の保険として、行動予定などについて連絡をとっておいて悪くはない。

林（1997）の報告によると近年では次第にビザが難しくなる可能性があるといわれている。調査地域について言えばトルコ国内におけるクルド人問題をかかえるために、近年では南東部への旅行については危険が高いために制限が加えられている。したがってそのような地域を避けるのが無難である。イスタンブルでも時々爆弾テロ事件が起こっているニュースが伝わるが、その危険度はロンドンやパリと同じくらいかあるいは低く見える。むしろ交通事故に巻き込まれる危険の方が高い。

調査はどの研究機関、誰を相手に選ぶかで調査の成否、申請許可の速度が規定される。ここでは官僚的であるとともにコネ社会でもある（トルコに限らず中東に共通な現象）、そのためには当然相手が納得し、協力できるテーマでなければならないし、その人の能力の枠を越えることはできない。

IV. 地理学における海外調査はどうあるべきか

0 対象地域について

中東地域に対する日本の地理学者の関心は低い。中東学会約400名の会員中地理学会所属者は9名にすぎない。本当に専門にしているのは数名と言う現状である。

文部省の科学研究費「重点領域イスラームの都市性」（1988～1991年）では地理学からは15名が参加し、最終成果ともいえる『事典イスラームの都市性』への執筆は200名のうち12名にすぎなかった。

現在進行中の科学研究費：現代イスラーム世界の動態的研究＝イスラム地域研究、代表者佐藤次高（1997～2001年）でも分担者78名中1名、協力者50名中1名、という具合にGIS

部門があるにもかかわらず地理学者の参加は少ない。とくに地理学では若い世代や女性が少ないことに気がつく。

科学研究費による海外調査と限定すれば、アフリカにしてもラテンアメリカにしても、どの地域も本当に専門に研究している地理学者の層は厚くない。

1 地理学の研究枠組み

現在では研究テーマ細分化が進む中で、自然から人文まで地理学の全分野をカバーするような古典的な地誌学的地域調査や、初期の（60年代から70年代前半のような）総合的なしかも広域の調査（地理学独自というよりは調査の一部に地理学者が組み込まれたもの）はありえない。

地域研究では1国単位の研究が主となる。地域研究者は言語や地域史から出発した人が多いことから分かるように、その地域に密着している。それに対して地理学者は最初からある特定の外国の地域にこだわって研究をする人は少ない。地理学における地域研究は、現在では国単位よりはかなり狭い地域の詳細な研究か、あるいは逆により広域の異なった地域間の比較研究を目指している。この場合の地理学研究とはかなり限定されたテーマに基づくものであり、地域を総合的に把握するという地誌的研究として成果を整理することを最初から目指したものは少ない。特定の地域の専門家を養成するという要求もないといつてよい。また広域にわたる調査の場合に直面する困難さは、資料の収集及び持ち出し、言語、入国・調査許可など多く、とくに中東地域では隣接する国々の政治的な関係に強く規制される。

問題意識とは別に調査技術的にも海外調査は国内調査の延長上に存在するものと考えている。国内での実績がないことをいきなり外国で行うのはかなり難しい（実績がなくて研究の申請が通るかどうかという問題とは別に）。言葉、制度などの制約からよく知らないことに対して十分に資料にアプローチできない場合がある。

さらに、国内でも県史や市史を別として県別、地方別の地誌が書かれなくなった現在（少なくとも個人レベルでは）、外国についても国別の地誌が書けるのだろうかという疑問が生じる。様々な活動や人の動きがグローバル化するなかでどのような枠組みで地域的な問題を記述するのがよいのだろうか。地誌としてまとめるとして、その地域的な単位をどのように求めるのか。外国について国より下位のレベルである、狭い地域についての研究成果の需要はあるのだろうか。現在ではかつて地域が閉鎖的な空間の枠組みのなかでまとまりを有していた時代ではない、とすると多くの人を納得させる地域での記載は難しい。

地理学における地域は空間的な連続性と共通性ないし均一性を有し、中心をもつことに

よって区切られる空間を問題にする。その点で所与の地域の空間的枠組みを前提として行う地域研究とは異なる。地理学においてはどのような地域単位で研究をするかがまず問われるであろう。

2 研究テーマと目的

地域の全体像が浮かび上がるような調査ができるのが理想である。そこから世界とのつながりがみえ、世界の課題が投影されている状況を明らかにすることができるような調査、すなわちBerry (1964) の提言した地理行列の単なる一つのセルを明らかにするのにとどまらない研究にすることが望まれる。地理学的研究の特徴として、広域のなかでの比較研究がある。幸いトルコはヨーロッパとアジアの中間に位置し、様々な現象に複合性が見られる。その点では興味がつきないフィールドの一つである。

具体的な事例として都市研究の意義を考えてみる。現在の世界の大都市ではそれが内包する問題は共通している。土地、住宅、交通、財政、環境などや急増する都市人口と市域の急速な拡大それに追い付かない都市インフラ。その発現のしかたにはローカル色が濃く反映されて地域差が大きい。他方では都市政策、水、災害問題などそれぞれに固有の問題もある。トルコの大都市でも、日本の都市でも、ヨーロッパのそれも共通する点は多いが、都市構造と都市社会は異なっている。トルコの都市にはヨーロッパ的な要素とアジア的要素、それにイスラム色が加わり、独自のものとなっている。具体的には大都市における旧市街の伝統的な形態と新市街の西欧化のコントラストがあげられる。

3 技術的課題としての国際的な競争下での調査地域と資料収集

とくに、ヨーロッパ諸国の中東地域に対する研究の厚み、歴史、調査体制（多くが現地に研究所をもつ）の違いが大きい。基本的な情報量の少ないなかで、地域的な穴場やテーマのニッチェを見つけなければならない。欧米の研究者や現地の人が気のつかない視点が求められる。調査者の地域とのかかわり方、地域とのスタンスをどのように置くべきか、それは現地で対応してくれる相手研究者のレベルとの相対的な関係にも強く規定されることになる。言語能力とも関係するが、どっぷりその土地につき過ぎても見えなくなることがあるし、上辺だけでは単なる旅行者と変わらないことになる。大都市の調査の場合には一人の能力に限りがあるから、多人数で行うことのメリットは大きいのだが、混成部隊を組む場合、よってたつ立場が研究者個人により幅が広がるし、その中での多様性の追及と統一性のバランスをとることが成果を上げられるかどうかに関わる難しい問題である。そこに現地調査の困難さと面白さが存在する。

文部省の国際学術調査を財源として行う調査では費用と時間の制約があり、ヨーロッパの研究者のように腰を落ち着けた調査は無理であるから、どうしてもゲリラ的、分散的に行なわざるをえない。短い期間でどこまでやれるか、ということと調査時期も主として夏休みを利用するとすると(大学に所属するという制約)、相手方の協力の得えやすさと動きの効率(相手はヨーロッパ並みの休暇期間)との間の微妙な調整が必要となってくる。

また、エクステンシブな調査とインテンシブな調査とのバランスが必要であろう。1年目にエクステンシブ調査を行い資料の存在と調査の協力者を見だし、2年日以降にインテンシブというのが、一般的な形態であろう。土地感がなくて人間関係が希薄な場所でのインテンシブな調査は無謀である。81年の末尾隊では農村調査のアンケート用紙を用意したが実施するには至らなかった。だがその時広範囲にトルコ国内各地を訪問したことはその後の調査研究に役立っている。87年以降の活動を見ても、アンケート調査が出来るようになったのは92年からのことである。それも都市への関わり方の密度の違いからアンカラにおいてようやく可能になったのであって、より巨大都市であるイスタンブルではいまのところそのような調査は我々には難しい。

4 相手国への成果の還元

トルコにおいては地域の発展につながる応用的研究への期待が大きい。先進諸国での研究との違いが大きく、都市計画、地域開発、資金援助や研究者の留学を要請される場合もある。純粹に学問的な興味からの過去についての調査よりも、未来指向型の研究の方が歓迎される。観光開発で地域の発展をはかっているアンタリヤでの調査では金払いのよい日本人の観光客を増やしたいという意図が見えている。それはなかなか難しいことであるとも伝えなければならない。

V. おわりに

10年以上かけて続けてきたトルコを中心とした調査研究では、まだまだやり残したことも多いし、集めた資料の整理できていない部分も多い。これからやるべきことの多さを実感している。筆者が関係した調査の地理学からの参加者の多くは、また機会があればトルコでの調査を続けたいと思っている。しかし、一方ではトルコだけの専門家になろうとは考えていないと思う。多くの事例を見ることから、豊かな研究の発想が生まれるのではないかと私は考えている。トルコはその意味で様々な比較の材料を提供してくれる優れたフィールドの一つである。多くの親切な人、すばらしい人との出会いを大切に今後も調査

を続けてゆきたいと思っている。

最後に、このようなシンポジウムでの発表の場を与えて下さり、トルコ研究の状況を整理し反省する機会を作ってくださった森川洋先生、すばらしい司会をされた岡橋秀典さん、研究に刺激的を与えてくださった他の発表者とシンポジウム参加者の皆様に感謝します。

文 献

- 奥村晃史 (1996) : トルコ・アナトリアの断層を発掘する. 『文明のクロスロード』 54, pp.83~90.
杉田英明 (1995) : 『日本人の中東発見』 中東イスラム世界2 東京大学出版会 312p.+46p.
林 佳世子 (1997) : トルコ共和国の研究体制調査報告. 『海外学術調査ニュースレター』 36, pp.7~11.
堀川 徹 (1985) : トルコでの学術研究. 『学術月報』 38-6, pp.39~43.
松谷浩尚 (1987) : 『現代トルコの政治と外交』 第三世界研究シリーズ 勁草書房 472p.
森川 洋 (1996) : 地誌学の問題点—エアスタディとの関連において. 『地誌研年報』 5, pp.1~8.

表1 トルコを対象とした学術調査（文部省科学研究費による）

年次 (件数)	研究代表者 課題 参加者数 対象国数 (ない場合はトルコのみ)
1975年 (1)	藤井知昭 イラン・トルコ民族音楽学術調査
1976年 (1)	田中正武 トルコ東部地域における栽培植物の調査
1978年 (2)	酒井良男 トルコ・チャルドラン地震 (1976・11・24) の地震工学的研究 谷 泰 ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究 (1次)
1979年 (1)	寺島 敦 ハムリングダム付近の誘発地震の研究 (総括研究)
1980年 (2)	谷 泰 ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究 (2次) 竹内啓一 地中海地域における過疎 9名 5国
1981年 (2)	大田 裕 トルコにおける地震被害の発生と減災とに関する総合調査 6名 2国 末尾至行 乾燥アジアにおける水利用技術の発生・伝播・定着とその背景に関する地理学的研究 6名
1982年 (1)	谷 泰 ユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究 (3次) 8名 4国
1983年 (2)	日向康吉 トルコ地方のアブラナ属並びに近縁属植物の系統発生に関する調査 3名 末尾至行 乾燥アジアにおける水利用技術の発生・伝播・定着とその背景に関する地理学的研究 6名
1986年 (4)	本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の断層活動に関する調査 10名 田端 守 トルコの伝統薬物と薬用植物資源に関する調査研究 7名 三木 亘 アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究 8名 7国 俣野敏子 東アジア農耕文化の南及び西アジアとの関連に関する総合的調査研究 (栽培植物と自然植生の現状と過去の復元) 7名 5国 予備調査
1987年 (2)	寺阪昭信 オスマントルコ帝国末期以降の都市発展に関する地理学的研究 6名 3国 俣野敏子 東アジア農耕文化の南及び西アジアとの関連に関する総合的調査研究 (栽培植物と自然植生の現状と過去の復元) 12名 5国
1988年 (5)	佐藤次高 イスラム都市社会の形成と変容に関する比較研究 7名 3国 本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の断層活動に関する研究 (2次) 10名 松田准一 トルコにおけるプレート衝突境界の地球科学的研究 7名 大野盛雄 米の道 6名

	<p>末尾至行 西南アジア, 東南ヨーロッパ間の基底物質文化の類似性に関する歴史地理学的研究 8名 4国</p>
1989年 (6)	<p>寺阪昭信 旧オスマン帝国領における都市空間とその機能の変容に関する地理学的研究 6名</p> <p>清水宏祐 イスラム都市における街区実態と民衆組織に関する比較研究 6名 3国</p> <p>松田准一 トルコにおけるプレート衝突境界の地球科学的研究 8名 2国</p> <p>佐藤次高 イスラム都市社会の形成と変容に関する比較研究 7名 3国</p> <p>本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の断層活動に関する研究(2次) 10名</p> <p>山内昌之 中東とソ連の都市問題とエスニシティの比較研究 9名 (共同研究)</p>
1990年 (6)	<p>寺阪昭信 西ドイツとトルコの都市問題に及ぼすトルコ人移民の社会地理学的研究 4名</p> <p>羽田 正 イスラム世界の都市空間構成に関する歴史学的研究—庭園を中心に 6名 4国</p> <p>田端 守 トルコの伝統薬物と薬用植物資源に関する調査研究 7名</p> <p>日高健一郎 小アジアとその周辺地域における大規模な組積造ドームの構造と歴史に関する学術調査 12名 3国</p> <p>清水宏祐 イスラム都市における街区実態と民衆組織に関する比較研究 6名 3国</p> <p>山内昌之 中東とソ連の都市問題とエスニシティの比較研究 9名 (共同研究)</p>
1991年 (7)	<p>寺阪昭信 西ヨーロッパ諸国とトルコの都市空間構造に及ぼすトルコ移住民に関する社会地理学的研究 6名 4国</p> <p>羽田 正 イスラム世界の都市空間構成に関する比較研究 6名 3国</p> <p>辻 成文 リキア地方沿岸古代・中世交易都市の美術, 建築, 都市計画の調査 8名</p> <p>安田喜憲 トルコ・シリアの環境変遷史と文明の盛衰 11名</p> <p>末尾至行 西南アジア, 東南ヨーロッパ間の文化接触に関する歴史地理学的研究 9名 4国</p> <p>日高健一郎 小アジアとその周辺地域における大規模な組積造ドームの構造と歴史に関する学術調査 13名</p> <p>田端 守 トルコの伝統薬物と薬用植物資源に関する調査研究 8名</p>
1992年 (8)	<p>本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の断層活動に関する研究(3次) 10名</p> <p>日高健一郎 小アジアとその周辺地域における大規模な組積造ドームの構造と歴史に関する学術調査 13名</p> <p>田端 守 トルコの伝統薬物と薬用植物資源に関する調査研究 8名</p> <p>辻 成文 リキア地方沿岸古代・中世交易都市の美術, 建築, 都市計画の調査 8名</p> <p>安田喜憲 トルコ・シリアの環境変遷史と文明の盛衰 10名</p>

寺阪昭信：トルコをめぐる調査の現状と課題

	<p>寺阪昭信 西ヨーロッパ諸国とトルコの都市空間構造に及ぼすトルコ移住民に関する社会地理学的研究 7名 4国</p> <p>大野盛雄 米の道—西アジア・地中海地域における米作社会の研究 3名</p> <p>末尾至行 西南アジア，東南ヨーロッパ間の文化接触に関する歴史地理学的研究 7名 4国</p>
1993年 (5)	<p>丹羽公雄 格子（中性子および陽子）のスピン構造の研究（共同研究）12名 5国</p> <p>本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の断層活動に関する研究（3次） 10名</p> <p>辻 成文 リキア地方沿岸古代・中世交易都市の美術，建築，都市計画の調査 8名</p> <p>安田喜憲 トルコ・シリアの環境変遷史と文明の盛衰 10名</p> <p>大野盛雄 米の道—西アジア・地中海地域における米作社会の研究 3名</p>
1994年 (7)	<p>本多義昭 トルコの薬用植物資源に関する調査研究 6名</p> <p>村井泰彦 日本の生活文化の通文化性に関する総合的研究 9名 2国</p> <p>日高健一郎 ハギア・ソフィア大聖堂を中心とする歴史的建築物の劣化現況調査と保存修復計画の立案 15名 3国</p> <p>家島彦一 イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究 9名 4国</p> <p>内藤正典 トルコからドイツへの出稼ぎ移民の社会・文化変容に関する研究 9名 2国</p> <p>竹内啓一 地中海世界沿岸都市におけるマイノリティー集団のネットワーク 6名 5国</p> <p>丹羽公雄 タウニュートリノの質量の測定（共同研究）13名 5国</p>
1995年 (12)	<p>松丸国照 トルコ共和国黒海沿岸地域の白亜記—第三紀境界層の有孔虫微化石層序と環境変化に関する地史学的研究 5名</p> <p>浅野和生 リキア地方（トルコ南西部）沿岸初期中世都市遺跡の発掘・調査 5名</p> <p>中林一樹 トルコをめぐる国際ツーリズムと都市発展との相互作用に関する社会地理学的研究 7名 3国</p> <p>青木保 アジア諸国における地域開発と異文化共存 11名 5国</p> <p>本蔵義守 北アナトリア断層帯西部域の地震活動予測に関する総合研究（共同研究）9名</p> <p>本多義昭 トルコの薬用植物資源に関する調査研究 6名</p> <p>白幡洋三郎 日本の生活文化の通文化性に関する総合的研究 9名 2国</p> <p>日高健一郎 ハギア・ソフィア大聖堂を中心とする歴史的建築物の劣化現況調査と保存修復計画の立案 15名 3国</p> <p>家島彦一 イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究 9名 4国</p> <p>内藤正典 トルコからドイツへの出稼ぎ移民の社会・文化変容に関する研究 9名 2国</p>

	竹内啓一 地中海世界沿岸都市におけるマイノリティー集団のネットワーク 6名 5国
	丹羽公雄 タウニュートリノの質量の測定 (共同研究) 13名 5国
1996年 (7)	青木 保 アジア諸国における地域開発と異文化共存 11名 5国 松本芳嗣 中央ユーラシアにおける砂漠緑地化に伴う新たなリーシュマニア症の流行 12名 3国 浅野和生 リキア地方(トルコ南西部)沿岸初期中世都市遺跡の発掘・調査 5名 日高健一郎 ハギア・ソフィア大聖堂を中心とする歴史的建築物の劣化現況調査と保存修復計画の立案 15名 3国 家島彦一 イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究 9名 5国 内藤正典 トルコからドイツへの出稼ぎ移民の社会・文化変容に関する研究 9名 4国 中林一樹 トルコをめぐる国際ツーリズムと都市発展との相互作用に関する社会地理学的研究 7名 3国
1997年 (9)	新谷英治 中東世界の伝統技術に関する歴史地理学的研究 10名 5国 大村幸弘 アナトリアの古代遺跡出土遺物の産地推定 8名 関 啓子 ソ連邦崩壊後の民族アイデンティティの形成 8名 4国 内藤正典 西ヨーロッパ諸国における移民のイスラーム復興運動 7名 5国 応地利明 熱帯半乾燥地でのミレット農耕と他農耕との接触複合状況及び農業再生に関する調査研究 8名 5国 本多義昭 トルコ系民族の伝統薬物に関する比較調査研究 8名 2国 浅野和生 リキア地方(トルコ南西部)沿岸初期中世都市遺跡の発掘・調査 5名 青木 保 アジア諸国における地域開発と異文化共存 11名 5国 松本芳嗣 中央ユーラシアにおける砂漠緑地化に伴う新たなリーシュマニア症の流行 12名 3国

資料：1983年からは各年度の「海外学術調査ニュースレター」から整理し、1980～1982年は「文部省科学研究費補助金採択課題一覧」ぎょうせい、1975～1979年は「学術月報」を使用した。追加採択は省略した。